



TITLE:

竹内法學士譯『富國論』

AUTHOR(S):

河上, 肇

CITATION:

河上, 肇. 竹内法學士譯『富國論』. 經濟論叢 1922, 14(4): 749-753

ISSUE DATE:

1922-04-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127886>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號四第 卷四十第

行發日一月四年一十正大

論叢

二重稅論

法學博士 小川郷太郎

我が國民所得の地方別研究

法學士 沙見三郎

マルクス氏餘剩價值説の評論

法學博士 田島錦治

小作制と小作法

法學博士 河田嗣郎

時論

華府會議に於ける支那關稅問題

法學博士 末廣重雄

我が邦の營業稅を論ず

法學博士 神戸正雄

勞働保險に關する一考察

法學博士 山本美越乃

說苑

地學觀社會學説に就きて

法學博士 財部靜治

雜錄

獨逸の同盟罷業保險

經濟學士 岡崎文規

安倍^{法學士譯}『唯物史觀と餘剩價值』

法學士 水谷長三郎

竹内法學士譯『富國論』

法學博士 河上肇

るから、明年で誕生滿二百年に達する筈であるが、この際法學士竹内謙三氏により *Wealth of Nations* の全譯が企てられたと云ふことは、學界のため慶すべきことである。

アダム・スミスの *Wealth of Nations* の日本譯は、今まで二種あつた。最も古いのは、明治十七年から十八年にかけて、故田口博士の經營されてゐた經濟雜誌社から發行されたもので、譯者は石川映作氏である。それは上中下の三卷に分れ、各卷約八百頁から千頁に近いものであつた。標題は「英國亞當斯密氏著、富國論」としてある。その二は、明治四十三年に公にされた三上正毅氏の譯本であつて、それは四百頁足らずのものである。扉には「アダム・スミス富國論全」としてあるが、實はアシユレーの拔萃本の翻譯である。今、武内學士の企てられたものは其の全譯であつて、底本にはキヤ楠の校訂本が用ひられてある。差當り公にされたのは其の第一卷であるが、第二卷、第三卷とも近く公刊せらるゝ筈だといふ。

竹内法學士譯『富國論』

河 上 肇

アダム・スミスが生れたのは一七二三年であ

雜誌 安倍法學士譯「唯物史觀と餘剩價值」

今吾々が、明治十七年代の譯書と、明治四十三年代の譯書と、大正十年代の譯書とを比べて見ると、其の間には少からざる差異がある。私は其の見本として、有名なる冒頭の一節を、左に轉載するであらう。

(石川氏譯)

「各邦民の年々消費する萬般の必要品と便利物とを之に供給する所の原資は則其年々の勤勞なりとす而して此等の物品たる常に勤勞の直作出物を以て成るが將た此作出物を他邦に鬻ぎて購買し得たるものを以て成らざるはなし。」

(三上氏譯)

「國民が年々消費する必要上并に便宜上の物品を供給する財源は、それが年々の勞働にあり。各國民は直接に其勞働に由て產出したるものを消費するか、否らざれば其勞働に由て得たるものを以て、他國民より購買したるものを消費するか、二者其一を出づべからず。」

(竹内氏譯)

「各國民の年々の勞働は、各國民が年々消費する生活の必要品及便利品を各國民に本來供給する所の元本である、而して此生活の必要品及便利品は常に或は此年々の勞働の直接の生産物より成るか、將た或は此生産物を以て他の諸國民より購買される所のものより成るのである。」

有名なる此の一句の原文は次の如くである。

The annual labour of every nation is the fund which

originally supplies it with all the necessities and conveniences of life, which it annually consumes, and which consist always either in the immediate produce of that labour, or in what is purchased with that produce from other nations.

此の原文と前記三種の譯とを比較するに、最近に出た竹内氏の譯文が一番善いには相違ないが、しかし明治十七年代に出た最も古い石川氏の譯文が、思ひの外に忠實なことは、恐らく讀者の注意を惹くに足るであらう、その文章の全體の構成が、三上氏のに比較して、遂に原文に忠實なのは勿論、一々の單語についても略ぼ同様の違ひがある。例へば原文に every nation とあるのが、三上氏の譯には「國民」となつてゐる、石川氏の譯には「各邦民」となつてゐる。又原文には all the necessities 云々とあるのに、三上氏の譯文にも竹内氏の譯文にも、all は見棄てられてゐるが、石川氏の譯には「萬般」と譯出されてゐる。又 fund といふ語は、三上氏によつて「財源」とされてゐるが、これら石川氏の譯語「原資」の方を優れりとすべきであらう。勿論九

牛の一毛を捉へて全體を推す譯には行かぬが、吾々は此の些細な一事を以てしても、明治の初年に田口博士の經營されてゐた事業が、如何に忠實さに富んでゐたものであつたかを、回顧することが出来る、しかし古い譯本を詮索することは、私の今の仕事では無い。私は次に、専ら竹内氏の新譯について、感じた事柄の若干を述べるであらう。

一、竹内學士の新譯には、その底本としてキヤナンの校訂本が用ひられてゐるが、譯者の例言には、「此書には頭註を掲げ、又脚註を附せり余は之に益せられたる所甚だ多し」とある。しかるに譯者が此等キヤナンの註釋の利益を讀者に頒つことに甚だ吝なるは何故であるか？ 試に其の一例を擧ぐれば、例へば第一篇第五章に於て、後の版に

Equal quantities of labour, at all times and places, may be said to be of equal value to the labourer.
と書いてある所は、スミス原本の第一版では
Equal quantities of labour must at all times and places be of equal value to the labourer.

となつて居り、又それに引續く言葉は、同じく第一版では、たゞ

He must always lay down the same portion of his ease, his liberty, and his happiness.

となつて居るのに、第二版以後では、之に條件を加へて、

In his ordinary state of health, strength and spirits; in the ordinary degree of his skill and dexterity, he must always.....

となつて居る。彼れの勞働價值論に重要な關係を有つ此等の句に、後の版になつて此の如き多少の修正が加へられてあると云ふことは、吾等の頗る興味を有つところであり、それは勿論キヤナンの脚註に明記してあることであるが、——さうして其れを譯本に示すことは、何の手数でも無いと思はれが、——譯者は何故か此の類のキヤナンの脚註を總て無視して居られる。

言ふまでも無く、キヤナンの版本には種々の著しき長所があるが、その長所の主なるものは、original editionの各版につき精密な比較がしてあつて、キヤナンの版本さへ一つ持つて居れば、original editionの各版を手許に揃へてゐ

1) vol.I, p.35.

るのと、同様の便宜が得られる點に在るのだが此の利益が譯本の上に傳へられてゐない事は、私の大に遺憾とする所である。なほ譯者の例言によれば、譯者は一八八〇年版の佛譯、一九一〇年及び一九二〇年版の獨譯を參照し、「右三者は常に座右に置き毎頁對照」せる上に、「時に C. W. Asher 及び F. Stoppel の獨譯をも引けり」。斯様に譯者は獨譯、佛譯等を參照し、之に基づき稍々煩はしと思はるゝまでの補註をところ／＼に施して居られるのに、その譯者が、今日最も廣く行はれてゐる英語の流布本——アシュレーの拔萃本——を全く看過して居られるのも、同じやうに私の遺憾とする所である。例へば第一篇の冒頭の有名なる句は

The greatest improvement in the productive powers of labour, and the greater *part* of the skill, dexterity, and judgment with which it is any where directed, or applied, seem to have been the effects of the division of labour.

となつてゐるが、アシュレーの版本には、part of the 三語が脱落して the greater skill, dexterity, and judgment が the greater skill, dexte-

ity, and judgment となつてゐる。從てアシュレーを底本とされた三上氏の譯本には「熟練技巧、判斷力の發達」となつてゐる。ところが私の知つてゐる限りでは、アシュレーの版本以外には之と同じものは一つも無いので、これは恐らく右版本の誤脱であらうと考へられるが、この版本は今日廣く世間に行はれてゐる上に、既に日本譯もあることだから、各種の佛譯、獨譯をまで參照するの勞を吝まなかつた譯者としては、此點——人口に膾炙してゐる有名なる文句——に關し、一言の注意を與へて置かれても、強ち不釣合では無からうと思ふ。

二、次ぎに些細のことについて數言を費せば、譯者がところ／＼に原語を挿入された親切は、吾々の感謝する所であるが、しかし原語を挿入する毎に、邦語に「」を附せられてゐるのは、可なり眼の邪魔になると思ふ。例へば卷頭第一のところは

各國民の「年々の勞働」annual labour は、各國民が年々消費する生活の「必需品」ne essaries 及「便利品」convenience を各國民に本來供給する所の「元本」fund である。

となつて居り、又第一篇第十一章の冒頭（譯本二〇四頁）は

「地代」rent は「土地」land の「使用」use に對して支拂はれる價格なり云々。

となつてゐるが、何故英語を挿入する毎に一々其の譯字に「」を附けて居られるのであらうか？ 原文に何か特別の注意でも加へてあるらしく見えて、却て面白くないと思ふ。又次の文章に於けるが如く

貨幣の唯一無二の用途 use (佛譯 fonction 阿獨譯 Gebrauch) は消費可能財を流通せしむるに在る。（譯本四六六頁）

英語を挿入しながら、その譯字に「」を附してない場合との區別は、何處に在るのであらうか？ 更に又、「用途」といふが如き普通の文字に原語并に佛譯、獨譯を加へながら、すぐ其れに引續く「消費可能財」といふやうな餘り聞きつけぬ譯字には、却て何等の手續をも施してないがその間の取捨には果して如何なる標準が在るのであるか？

又譯者が譯文に口語體を採用しながら、例へば naturally に該當する所へ「都て」とし（一例——譯本二〇四頁）、therefore に該當する所へ、「肆に

由是觀之」とし（二例——譯本二五四頁）又は「肆に」とし（一例——譯本二二二頁、この用例は到る處に在り）、或は for に該當する所へ「何者は」として居らるゝ（二例——譯本二〇五頁二七二頁）が如く、わざと解り難き漢字を用ひられて居るのは無用のことだと思はれる。もつと通俗な文字を用ひたからとて、譯文が下品になると云ふ譯もあるまいから。

三、最後に譯文の出來榮について思ふがまゝを述ぶることを許されるならば、或る個所は、餘り直譯的なため、又は其の他の理由により讀者にとつて理解し難いものになつてゐると思ふ。例へば in countries which are fast advancing to riches を譯して「迅速に富に向つて前進しつつある國に於ては」となし（譯本一三五頁）the progress of the value of silver を譯して「銀の價値の進展」となし（同二七二頁）或は to lay down his equipage after he has once set it up を譯して「其エクワイペヂを一度凝せるの後廢する」としてあるが如き（同四七八頁）は、その實例である。

以上は私が譯書を瞥見することによつて思ひ付いた二三の點である。譯者が多大の苦心を拂つて仕上げられたものに對し、斯様に缺點をの

み探し出して彼れ此れ言ふことは、不穩當に見えるかも知れぬが、私の趣意は、折角の全譯が企てられた以上、其の續卷が善いが上にも善い翻譯とならんことを希望するに外ならない。